

我が国近代詩の淵源をたどると「新体詩」に行き着く。新体詩とは、明治初期に西洋詩

歌の形式と精神を取り入れてつくられた新しい詩形である。それ以前、詩と言えば主に漢詩を指していたので、新体詩は当時の人々に新鮮な驚きをもって迎えられた。

日本文学史上、新体詩は明治二十〜三十年

代、森鷗外・北村透谷・島崎藤村・土井晩翠・蒲原有明らによって発展したとされる。そうした影響を受けた、郷土伊那谷で作られた新体詩を紹介する。今回は教育者とし

て著名な松村蓬麻（一八七四〜一九五二）の作品である。

蓬麻は松尾の人で、名は正一、蓬麻、虚明、青霞と号した。彼は向学心旺盛で、飯田の漢学者羽生科山や丸山子

堅について漢籍詩文を修めるとともに、上京

して杉浦重剛経営の東京英語学校に学んだ。そして、若くして『孟子学説』『孔子学説』他を著した。明治三十七年、飯田常盤町に「松濤義塾」

を創め、郷党子弟に英語・漢文・倫理・数学・国語を教えた。以来、彼の薫陶を受けた

者は、三十六年間で千五百人に及び、その門からは、中原謹司・羽生三七・吉川亮夫・市村威人・古川竹次郎・矢高束等、郷土を代表する政治家・教育者・

忍耐

千里の路も歩みより、大河の水も雫より、その源はさゝやかに、岩が根潜りゆきゆくも、末はま広く又遠し。

人生ゆくへ君見ずや、左に波風追ひせまり、右に険しき峰つゞく、逆巻く濤に舟漕ぐか、

鎌倉貞男

声に出して読みたい郷土の近代文学（四）

鎌倉貞男

医者・実業家等が輩出した。

他方、蓬麻は東洋哲学や漢詩に堪能であるとともに、新体詩にも名が高く、地方紙「南信」にも作品を寄せている。次はそうした中の一つである。

あるは剣の峰越すか。成功の二字冠して、希望の光前にあり、寒素に磨く胸の玉、辛苦に鍛ふ鉄石心、いくその艱み何かせむ。

剛毅の剣手にとりて、

情弱の茨をきりひらき、

真如の月のほゝ多むを、あゝ勇ましき忍耐よ、

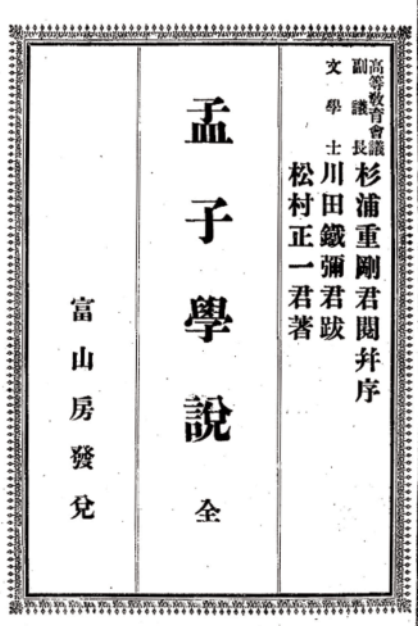
安く楽しく尊しや。

を突き進む様を、比喩

や対句等を使って表現している。そして「忍耐」という抽象的題材を、具体的用例を引きながら、読者に語りかけるように歌いあげている。

本詩は明治三十年代の作と思われるので、作られてから既に世紀以上経過しているが、今も蓬麻の熱と意気が伝わってきそうな気がする。

この作品は、五行五連から成る七五調文語定型詩である。詩は、題の通り強い忍耐心をもって、前向きに人生



明治33年8月発行の『孟子学説』